

| | | | |
|--------------|---------------------------------------|---------------------------|-------------------|
| セッションⅣ | アジア共同体構想と宗教統一のための キリスト教の機能 コメント | 鄭慶均 ラマン・C・レイエス 藤井真斎 | 111 133 139 |
| セッションⅤ | アジア共同体構想と宗教統一 ―特に仏教について― コメント | ブーン・ニラケシユ | 165 |
| セッションⅥ | ヒンドゥー教の文献とその復興について コメント | ナラヤン・M・サムタニ A・N・ラオ | 169 191 |
| セッションⅦ | 神道思想と統一思想 コメント | 田中熊雄 姜漢永 | 197 223 |
| 統一思想の立場からの感想 | | 李相憲 | 229 |
| 特別スピーチ | 「アジア共同体構想と宗教統一」について | アンドレ・C・ザウイ | 285 |
| あとがき | | | |

基調論文

アジアの新文化創建と統一思想



李相憲(イ・サンフォン)

韓国統一思想研究院院長

韓国国際勝共連合理事長

〈主著〉

『統一思想要綱』(一九七三)、『統一思想解説』(一九八三)、『統一思想教材』(一九八四)、『新しい価値観の定立』(一九八三)、『Communism: A New Critique and Counterproposal』(一九七三)、『Unification Thought』(一九七三)、『Explaining Unification Thought』(一九八一)、『The End of Communism』(一九八五)。

序言

アジアの各国から集まった諸教授、学者の方々、そして紳士淑女の皆様。第五回の本シンポジウムで再びお会いできて嬉しく思います。公私多忙であらせられるにもかかわらず、このように多くの方々が登場してくださって真心から感謝申し上げます。私がこの時間発表しようとする題目は「アジアの新文化創建と統一思想」であります。

ご承知のように、昨年の第四回のシンポジウムの主題は「アジア共同体構想と統一思想」でありました。アジア共同体がいったん成立し得るということを前提として、その共同体成立に際しての六つの部門の役割、すなわち政治、経済、教育、芸術、宗教、哲学等の諸部門の役割について、統一思想の立場から討論し合ったと記憶します。そのとき私は基調演説において、アジア共同体構想を神の摂理という観点で自分の意見を述べさせていただきました。

本シンポジウムの今回の主題は「アジア共同体構想と宗教統一」であります。この主題の核心である「アジア共同体構想」を「アジア新文化の創建」という観点から考察してみると同時に、新文化創建のためには宗教相互間の協力や価値観の統一など、いくつかの克服すべき問題点があるということ、そしてこれらの問題点に対する統一思想の立場からの克服の代案を提示し、宗教統一および愛に関する統一思想の見解を紹介しようと思うのであります。

一 今日の世界の状況

本論に入る前に、今日の世界の状況をしばらく考察させていただきます。第二次世界大戦が終わった後、世界は米国とソ連を頂点とし自由と共産の两大陣営に分立されて、各陣営ごとに内部的には比較的団結がよく行われてきましたが、一九六〇年代に入ってからはその団結が瓦解しはじめ、共産陣営は中ソの分裂をはじめとして国ごとに独自路線を追求するようになり、自由陣営も国家間の利害関係が食い違い、各々自国の国家利益追求を優先するようになりました。このような分裂現象は国家間だけでなく、宗教間、人種間にも現れ、先進国と後進国間にも出現したのであります。このようないろいろな次元の分裂と対立は、多くの当事者間の利害関係と絡み合い、国際的に社会的にいろいろな摩擦、対立、紛争を惹き起こしてきました。

それで今日においては、世界は手におえない大混乱に陥ってしまいました。戦争、テロ、拉致、破壊、放火、社会的犯罪、貧富の格差、不正、腐敗、社会的不条理、道徳的退廃、麻薬中毒、アルコール中毒、女性の倫落、家庭の崩壊等が全世界を覆っています。これは文明（文化）的側面から眺めてみると、政治、経済、社会、教育、法律、哲学、芸術、倫理、道徳等、全文化の領域が総体的に方向を喪失していることを意味します。すなわち今日の文化は一大危機に直面してしまいました。民主主義も共産主義もこの混乱を收拾することができなくなり、宗教も思想も既存の方式では束手無策になってしまいました。そのようにして、今日の世界状況は、そのまま放置すれば遠からず弱肉強食の無法天地になってしまうであらう。

※（註）私はここで文明と文化を区別しないで、同一の意味に使っています。

二 文化的側面から見た今日の混乱の原因、および西洋文明の功過とその没落

それでは、今日の世界的な大混乱の根本原因は何でしょうか。それは第一に物質万能主義と無神論が全文化領域を支配してしまったからです。政治、経済、教育、哲学、芸術、倫理、道徳等がすべて物質主義、無神論の捕虜となってしまったからです。第二に個人主義、利己主義、人本主義が権利平等の美名の下に個人と個人を分裂させ、国家と国家を離間させたからです。特に国家利己主義は今日の世界平和の大きな障害要因の一つとなっています。言い換えれば、今日の世界混乱の原因は、精神主義と物質主義の対決において精神主義が敗北してきたからであり、宗教と反宗教（無神論、自然科学）との対決において、宗教が敗北したからです。過去において人類の精神を指導してきた宗教が、今日においてその精神的指導力を喪失したからです。これは文化的（文明的）側面から見たとき、東洋文明（精神文明）が西洋文明（物質文明）に圧倒されてきたからです。

西洋文明は本来、中世時代では神本主義の下に精神文明（キリスト教文明）でありましたが、近世以後には科学の発達によってキリスト教が物質主義に圧倒され、西洋文明は人本主義（個人主義）下の物質文明に転落したのであり、現代に至っては東洋文明までも（東洋に対するキリスト教の貢献にもかかわらず）西洋の物質文明に汚染され、その活力を喪失してしまいましたのであります。今日貧富の格差問題を起こした資本主義と階級闘争を煽動する共産主義は、問い詰めれば西洋文明（物質文明）の双生児であって、実はこの二つの主義が今日物質主義

と無神論をまき散らしながら、世界を混乱のつぼに追いやっているのです。物質文明と化した西洋文明は、宗教（キリスト教）を圧倒しながらも、その間政治、経済、軍事、社会、学問、産業等文化全般にわたり飛躍的發展を来たしたのであり、さらに進んでアジアに進出して東洋社会の近代化を助けることによって、人類文化に大きく寄与したのは事実であります。しかしその間、政教分離の美名の下に、長らく宗教を軽視し、無視することによって、今日に至ってはついに人類の精神の空洞化を生じせしめ、価値観の崩壊現象を招来するに至ったのも、また事実であります。これが、今日の世界が経済の驚異的な成長にもかかわらず、混乱から抜け出るこゝろができない根本原因になっているのであります。このようにして、今日の文化的危機は西欧的な方式（人本主義的方式）では、克服することができないようになりました。これは西洋文明の没落が迫っていることを意味するのであります。歴史を顧みるとき、宗教によって栄えた一地域の文明は、その宗教が無視されたり、その役割を果たし得なくなったときには、その文明も没落したという例をいくらかでも発見することができるからです。このようにして西洋文明は、その双生児としての資本主義および共産主義とともに今終末に近づいているといわざるを得ません。

三二 新文化と神本主義

西欧的な人本主義方式では今日の危機的状況から文化を救出することが困難であるとすれば、今日の文化を救済することができるような他の方法はないのでしょうか。それがまさに神本主義を新しく立てて、新しい文

化を創建することあります。人本主義や物質主義は人間中心であるため、そのままでは個人主義、利己主義に流れて和解と親和が難しいのですが、神本主義は神中心であるため、神の愛を中心として万人が互いに親和することができるところです。歴史を顧みるとき、一定地域の混乱を收拾するにおいて、神本主義的な新しい宗教が生まれ、いろいろな分裂、対立を和解させ、統一を成し遂げることによって、新文化創建の主流となった例を数多く見ることができます。ローマ文化が没落する時の混乱を、神本主義宗教であるキリスト教が收拾したのをわれわれは知っております。キリスト教が、当時の分裂した価値観を統一し、西欧の中世文化を花咲かせたのであります。また、七世紀にアラビア半島のアラビア人の民族的分裂と雑多な宗教の対立等で混乱が起こったとき、新しい神本主義であるアラブ神のイスラム教が出現して、この混乱を收拾、統一し、サラセン文化を生ぜしめたのもその例といえます。このような歴史的な先例に従って、今日の文化的危機から人類を救出するためにも、ここに新しく神本主義的な宗教の時代が到来しなければならなくなったと見るのであります。

それでは、そのような宗教はどんな宗教でありましょうか。そのような宗教は必ずしもキリスト教やイスラム教だけである必要はないと思います。宇宙の根本的な存在が愛の本体であることを認める宗教であれば、すべて神本主義の概念に包含され得るからであります。宇宙の究極的存在が、「神」という名称でなくても「愛の本体」であればよいからです。その意味で、キリスト教、イスラム教のみならず、またユダヤ教はいまでもなく、仏教もインド教も儒教も、すべて広い意味の神本主義になるのであります。仏教の「真如」「大日如来」や、インド教の「ブラフマン」や、儒教の「天」がすべて「愛の本体」として表現されているのは、周知の事実であります。その他の宗教においても同様であります。このような宗教が、西洋の物質主義、人本主義に圧倒されずに、

お互いに協力し合いながら、そして現代に合うように姿勢を立て直しながら、「互いに愛せよ」という教祖または経典の教えに従って健全にその本然の使命を果たしたならば、アジアは既に統一された精神文化圏、すなわち西洋文明を包摂した愛の文化圏を形成したのであります。何故かといえば、これらはすべてアジアの宗教であり、アジアはまさに宗教の大陸であるからです。そして長い歴史を持ったこれらの宗教は、一時または数次、一定地域に輝かしき文化を咲かせたことをわれわれは知っています。そのような意味で、今日の文化的危機から人類を救済するために、アジアの宗教は覚醒しなければなりません。神本主義による新しい文化創建のために行動する時が来たのであります。

四 新文化創建におけるいろいろな問題点

ところでアジアの新しい文化創建のために、宗教がその本然の使命（愛の実践）を果たすにおいて、いくつかが克服しなければならない問題点があることをここで指摘せざるを得ません。それは次のようであります。

- (1) 宗教相互間の協力の問題
- (2) 価値観の統一の問題
- (3) 地域的、伝統文化相互間の調和の問題
- (4) 科学と宗教間の対立の解消の問題
- (5) 各文化領域への方向提示の問題

- (6) 共産主義克服の問題
 - (7) メシヤ再臨観の解釈の問題等であります。
- これらの問題に対して、次に簡単な説明を加えようと思えます。

(1) 宗教相互間の協力の問題

すべての宗教は、その教祖や経典の教えの核心が「互いに愛せよ」ということであることは、再言する必要があるかもしれません。それで、一つの宗教内の信徒たちは、互いにこの教えに従ってたやすく相互親和し団結します。しかし異教との間には「相互親和」がよく行われない場合があるのを時々見ます。ある宗教と宗教の間では、紛争が起こることさえあります。新文化創建においてこのようなことはなくならねばならないし、同じ信徒間の親和と同様に、宗教相互間においても相互尊重、相互親和が行われなければならないのであります。

(2) 価値観の統一の問題

今日の混乱の原因は、これを価値観の側面から見ると、善の基準が一致していないところにあると見ることが出来ます。従って今日の混乱を收拾するためには、万人の基本的な善の標準が同一でなければなりません。一つの事実において、ある人は善と見、他の人は悪と見るならば、その二人の間では協力なされにくくなるでしょう。宗教は教理、儀式、戒律が違い、さらに信仰は排他性を帯びやすいために、宗教ごとに善の基準が同一であるとはいえません。ここに宗教の価値観をいかに統一するかが問題になります。

(3) 地域的伝統文化の相互調和の問題

新文化は宗教間や国家間に紛争や衝突のない統一文化でなければなりません。ところが今日では、国ごとに地域ごとに伝統文化が残っており、各伝統文化ごとに一定の価値観を持っており、従って、このような文化的価値観の相違によって起こり得る摩擦を、いかに調和させることができるかということが問題であります。

(4) 科学と宗教の対立の解消の問題

地動説を発表したガリレオが宗教裁判を受けて以来、科学と宗教は両立することができないものと認識されてきたのであり、このために科学の発展に反比例して宗教（キリスト教）は萎縮してきました。さらに科学的に説明することができない聖書や奇事等は迷信として見なされて、キリスト教の萎縮はさらに加速化されてきました。これが今日の物質文明に宗教が圧倒された主要な原因の一つでもあります。宗教が優位を占める新文化の時代においては、科学と宗教が両立するのはもちろん、互いに協力するところまでいかなければなりません。そのためには宗教的事実を科学的に（少なくとも論理的に）説明できなければならぬし、また科学的事実を宗教的に説明することができなければなりません。果たしてこのようになり得るかがまた問題であります。

(5) 各文化領域への方向性提示の問題

今日の世界的な大混乱は、既に指摘したように政治、経済、社会、法律、教育、哲学、芸術、学問、倫理、言論等、全文化領域が方向感覚を喪失したのにも起因している。新文化創建のためには、このように方向を喪失した各文化領域が同一の方向を持つように宗教が指導しなければならぬのです。このことがまた問題にならざるを得ないのであります。

(6) 共産主義克服の問題

発展のためには闘争が必要だという唯物弁証法を真理と信じている共産主義理論を批判克服することも、新文化創建のために宗教が遂行しなければならぬ課題であります。なぜならば、今日共産主義は陰に陽に世界の至るところで、「革命」や「解放」という名の下で、戦争、紛争を挑発し混乱を一層助長しているからであります。

(7) メシヤ再臨観の解釈の問題

新文化のためにすべての宗教が相互協力するためには、まず教理の相互理解が必要であることは再言する必要があります。ありません。ところでキリスト教の教理には、メシヤ（イエス様）の再臨に関する部分があります。メシヤが再臨して審判するとなっています。他の宗教にはこのような再臨思想がないようでもあります（ただし、仏教には弥勒菩薩の再臨説がある）。従って、キリスト教の再臨観を他の宗教がどのように理解するか、また問題になると思います。新文化の形成において再臨のメシヤが果たして必要かどうか、再臨のメシヤは来られて具体的にどんなことをされるのか、再臨のわざと他宗教との関係はどのようになるのか等が、問題にならざるを得ないと見るのであります。

以上、アジアの新文化創建のために、宗教がその本然の使命である愛の実践を果たすにおいて、克服しなければならぬいくつかの問題を説明しました。

「アジア共同体構想」を取り扱うにあたって、このような諸問題を考慮に入れるのも必要ではないかと思えます。それでは次に、これらの問題に関する統一思想の立場からの代案をまとめて、「アジア新文化創建と統一思想」という題目の下に、いくつかの項目に分けて簡単に説明させていただきます。

五 アジア新文化創建と統一思想

ご存じのように、統一思想は文鮮明先生思想であります。文先生は啓示を通じて神から直接この思想の内容を伝え受けられて、この思想を統一思想または神主義(Godism)と呼びました。それでは次に、上の問題の解答に関連した統一思想の内容の要点を話させていただきます。

(1) 宗教の眞の設立者は神である

統一思想は、歴史上のすべての宗教の眞の設立者は絶対者であられる創造主、神と見ており、地上で宗教を創始した教祖たちについても、その神が立てたと断定しています。そして各宗教の信仰の対象、または宇宙の根本体も、たとえその表現は違っても、すべて同一の神と見るのであります。すなわち、絶対者である神が一定の時代と地域に符合するように姿を変えて自身を表したのが、各宗教の信仰の対象であります。ユダヤ教の「エホ

バ」、イスラム教の「アラー」、仏教の「真如」あるいは「大日如来」など、インド教(ヒンドゥー教)の「ブラフマン」、儒教や天道教の「天」、神道の「天御中主神」等は、すべてキリスト教の神と同一な創造主である神が、形を異にして自身を表現した姿に過ぎないと見るのであります。

(2) 各宗教の教理の中心眞理は、絶対者なる神の教えである

従って、すべての宗教の教理の核心も、同一なる神の教えであります。ただ地域的事情に合うように表現が異なって表れたに過ぎません。例えば仏教の「慈悲」やイスラム教の「仁愛」やヒンドゥー教の「最高愛」や儒教の「仁」やユダヤ教の「愛」も、すべてキリスト教の愛と同じ意味に見るのであります。ところが神が一定地域に一定宗教を立てた目的は、一定の眞理でその地域の人間たちの無知を悟らせ、彼らをして愛を実践させた後、最終的には人間始祖の墮落によってでき上がった罪の世界を復帰して、地上に統一された愛の世界(統一文化の世界)地上天国)を実現するところにあつたのであります。

(3) 一般宗教の地域的制約性とキリスト教の汎世界性

ところが紀元前に出現した宗教(例…儒教、仏教、ユダヤ教等)は、一定地域の人々を悟らせて善導するためのものであつたので、その教理(眞理の表現方式)はたとえ同一なる神からの眞理ではあつても、その表現は地域的な制約性をまぬがれることができなかったものであります。従って神は統一された文化の世界を立てるために、罪惡歴史の終末期において、すべての宗教教理の神髄を統一したのと同じような汎世界的な教理を立てて、既存

のすべての地域的宗教を一つに和合せざる摂理を推進されるのであります。そのような摂理の下に、イエス様をメシヤとして地上に送ったのであります。しかし、イスラエル民族の不信によって、予定された汎世界的な真理を全部は宣布されなまま十字架の刑を受けられて、地上天国実現の課業は二千年後の再臨時まで延期されたのであります。

(4) 再臨時としての現代の宗教と汎世界的真理の出現

神は、摂理が延長される二千年の間、すべての宗教をして一層広い地域の人々を教化するように、周辺地域に拡散し続けながら（そのため宗教圏の重畳まで現れる）、再臨時の時期を迎えるようにしたのであります。紀元前に出現した宗教が大部分そのまま残って今日に至ったのはそのためでありました。（ただし、中東地域はゾロアスター教の代わりに、新しくイスラム教が出現して、同地域とその周辺地域を教化してきたのであります。）今日までのこのような宗教の残存は、終末期にすべての地域的な宗教教理を汎世界的な真理と連結させようとする神の摂理であつたのであります。

今日はまさに罪惡歴史の終末期（末世）であります。既に指摘しましたように、世界は今大混乱に陥つて、従来の方式では到底收拾することができない段階に至りました。この危機を克服するにあたっては、宗教さえも完全にその無力性を表してしまいました。

今日の終末期はまさに再臨時を意味するのであります。すなわち、汎世界的な真理が出現する時期を意味するものであります。このときに神は実際にその真理を地上に出現させました。神が啓示を通じて文先生に知らせた真理がそれでありました。それがまさに神主義（Godism）であり、統一思想であります。今日まで、文先生が推進してこられた統一運動を通じて、この真理がすべての宗教を和合せ得る汎世界的な真理だということが確認されており、のみならずすべての難問題を解決することができる鍵でもあるということが立証されております。参考までに、これに関する文先生の証言を次に紹介いたします。

(5) 統一思想に関する文先生の証言

「私はかつて長い祈りと瞑想の生活からついに実存する神に出会い、この絶対真理を伝授されてきました。それは全宇宙と人生と歴史の背後に隠されたすべての秘密を明らかにした驚くべき内容でありました。この内容を社会に適用すれば社会問題が解け、これを世界に適用すれば世界の問題が解けるのであります。のみならず、宗教の未解決問題、哲学の未解決問題も解決されるのであります。特に、これを共産主義理論の批判に適用したとき、共産主義のすべての虚構性が白日の下に晒されると同時に、共産主義に対する代案も立てられるのであります。これはかつてなかった新しい人生観であり、世界観であり、宇宙観であり、新しい摂理観であり、歴史観でありました。これはまたすべての宗教教理や哲学の特性を生かしながら全体を一つに包容することのできる統合の原理でもあります。私はこの思想を統一思想または神主義と名付けました。」（一九八五年十二月十六日、国際勝共安保決議大会での演説文より）

六 宗教統一および愛と統一思想の立場

(1) 宗教統一と統一思想

次は本主題の中の「宗教統一」について、統一思想の見解を述べようと思います。統一思想において、「統一」とは、主体と対象が共通目的を中心としてお互いに愛し合うことによって、または円満な授受作用によって、合性一体化することであり、従って宗教統一とは、共通目的を中心として宗教同士がお互いに円満な授受作用をすること、すなわち協力し合うことを意味するのであります。共通目的とは、すべての宗教の教えである「愛の実践による善の世界（天国）の実現」であります。ここで重要なのは、主体と対象はお互いに相手の存在を認めると同時に、相手の見解を尊重することであり、ここで共通目的を設立するには、各宗教は次の事柄をまず認めることが必要であると見るのです。すなわちすべての宗教が唯一絶対者である神によって立てられたということ、神が地上に愛による善の世界、すなわち地上天国を実現するという目的（理想）をもって人類を善導するために宗教を立てたということとをまず承認することです。なぜならば、神は絶対者でありますから、創造目的も絶対であり、宗教を立てた目的も絶対であります。従ってここに、宗教相互の価値観の一致とともに、相互の協力のための共通目的が容易に確立されるのであります。

これを言い換えれば、宗教相互の共通目的の設定は、創造主たる神の創造目的を認めることによってはじめて可能であります。

(2) 宗教の愛と統一思想

次に、宗教統一における愛の問題について、統一思想の立場を紹介いたします。上述したように、宗教は表現こそ異なれ、皆愛を実践すべきことを教えています。統一思想における愛の実践とは、「神の愛の実現」であります。神の愛はまず、家庭を通じて父母の愛、夫婦の愛、子女の愛として、すなわち家庭愛として実現されます（この家庭愛は世俗的なものではありません）。次に、この家庭愛を社会に拡大し、国家、世界に拡大します。世界にまで拡大された神の愛が、真の意味の人類愛であります。すなわち、人類が神を父母としてお互いに兄弟姉妹の関係で愛し合うのが、真の人類愛であります。

ところで、愛には次のような機能があります。

①まず神の愛は強力な和合力であり、和解力であると同時に、幅広い抱擁力であります。神の愛が実践されれば、いかなる対立も衝突も和解と化し、いかなる怨讐も抱擁されて友人とも化する所以であります。

②神の愛は憤りと敵愾心を静める鎮静力であると同時に、すべての悲しみと苦痛と孤独さをなくさめてくれる慰撫の手であります。

③また神の愛は生命の源泉でもあります。ひからびた生命を蘇生させ、傷ついた魂に再生の希望を抱かせるのであります。

④また神の愛はすべての格差を平坦にする平準化の力でもあります。神の愛が現れれば、貧富の差も人種の差別も知識の差もすべて消えることになっていきます。

このように神の愛は、この世のいかなる力よりも強力であり、いかなる政治権力よりも、いかなる武器よりも強いのです。このような愛（神の愛）によってのみ、真なる平和が定着すると同時に、世界統一、文化統一が成

就されて、地上天国が実現されるのです。

以上、アジア新文化創建において提起されるいくつかの問題点と、宗教統一および愛について、統一思想の立場を明らかにしました。

セッションI

儒教思想より

アジア共同体と宗教統一を見る